教職大学院 Newsletter No.164
福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.12.13（公開版）

「『嶺南ふるさと学習』推進プロジェクト」がつなぎ、ひろげるもの

福井県教育庁嶺南教育事務所　所長　前田　良則

嶺南教育事務所は、嶺南２市４町を管轄する県内唯一の教育事務所です。総務課、指導相談課、特別支援教育課、研修課の４課で事務を分掌しており、県の行政職員と学校籍職員（教員）が勤務しています。本年度は「福井県教育振興基本計画の理念を踏まえ、人権尊重の精神を基盤に、嶺南の特色を生かした『夢と希望』『ふるさと愛』を育む教育を推進する」という基本方針を新たに掲げました（※下線部は今年度より明記）。さらに、本庁や嶺南の市町教育委員会、小学校、中学校、県立学校、福井大学、福井大学連合教職大学院との連携・協働を推進し、嶺南地域の特色を生かした教育振興と新たな時代を見据えた教育課題の解消に努めています。

さて、嶺南地域の教育における「強み」は何でしょうか。小規模校・少人数学級だからこそできるきめ細やかな授業、身近にある豊かな自然や協力的な地域人材を生かして探究的な学習がダイナミックに展開できること、そして、何より嶺南２市４町のつながりが深く、市町間の教育における連携・協力が充実していることです。児童生徒においては全国学力・学習状況調査やＳＡＳＡの意識調査から「自他や集団のよさを認める意識が高いこと」が分かっています。これらの嶺南地域の特色を生かした「強み」を、人口減少や慢性的な嶺南出身者の教員不足、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した「引き出す・楽しむ」教育への転換、家庭・地域との持続可能な連携推進という嶺南地域の課題解消につなげていくことが必要であり、それが嶺南教育事務所の大きな役割であると考えています。

このような状況の中で、令和２年度の10月に行われた嶺南地区教育委員会協議会主催の懇談会の中での協議を出発点として、県の重点施策の一つである「地域に貢献しようとする心を育むふるさと教育」の理念を踏まえつつ、嶺南地域全体の教育振興のために進めるプロジェクトがスタートしました。それが、「『嶺南ふるさと学習』推進プロジェクト」です。このプロジェクトは、嶺南地域の持つ「強み」を生かして、嶺南の学校・校種間が連携し、ふるさと学習を軸とした探究的な学習の充実を図ることにより、新しい時代に必要となる資質・能力を育成することを目的としています。さらに、嶺南全域の教育力が向上し、ふるさとに愛着のある子どもたちが育ち、将来にわたって嶺南で活躍する人材の育成につなげることを目指しています。

内容

巻頭言　(1)
インターンシップ/週間カンファレンス報告　(3)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより　(9)
10月カンファレンス報告　(16)
札幌ラウンドテーブル報告　(24)
研究会等情報　(30)

昨年度からスタートしたこのプロジェクトは、3つのステージで構成しています。第1ステージは「知る」として、各校の取組を知るための情報発信や交流・共有の場を持っています。また、異校種間のつながりを調査したり、研究推進校を指定して資質・能力の評価方法の調査研究を行ったりしています。第2ステージは「つなぐ・ひろげる」として、各校が校種の枠を越えて地域の中でつながり、探究的な学びの場や取組を広げていけるよう、各校のカリキュラム・マネジメントの充実や教員の指導力向上を目指します。第3ステージは「つくる・かかわる」として、嶺南地域の児童生徒が主体的なつながりをつくり、かかわる活動へと進展していく予定です。

今年度は、第1ステージ「知る」の2年目となり、第1回目の嶺南ふるさと学習推進プロジェクト会議を6月21日に実施しました。その指導・助言者として、福井大学連合教職大学院から三田村彰先生、清川亨先生に、福井大学から淺原雅浩先生に参加いただき、ご助言をいただきました。会議では、嶺南地域の県立学校の校長先生、小中学校代表の校長先生、そして嶺南教育事務所プロジェクト実行委員がオンラインで嶺南ふるさと学習についての情報共有とグループセッションによる協議を行いました。今年度のテーマとして、育成すべき資質・能力の中から「自ら『問い』をつくる力」に焦点をしぼり、その力の育成や見取りと評価について話し合いました。また、異校種間や地域・外部団体とのつながりについても互いに確認し合いました。

また、今年度も「先生方の学び交流オンライン座談会『R-café』」を実施しました。『R-café』とは校種や世代を超えた様々な教員が気軽に実践交流・授業交流する場のことです。7月13日には「嶺南で実現する探究的な学び」と題して、ゲストに一般社団法人こたえのない学校代表理事の藤原さと氏をお招きし、小中高の19名の先生が参加する中で、各校で進めている探究的な学習の実践紹介やそれぞれが抱える悩み・課題などを共有しました。また、昨年度の『R-café』では大空小学校初代校長の木村泰子先生や慶應義塾大学特任准教授の若新雄純先生にゲストとして参加いただき、楽しく充実した交流の場を持つことができました。『R-café』の中で、参加した教員が熱く語り、聞き合う姿から、教員間のつながりが深くなり、校種間の壁も少しずつなくなってきたように感じています。

来年2月10日からは、第28回目となる嶺南教育事務所教育研究発表会「嶺南教育実践フォーラム」を開催します。今年度の開催テーマは「『学び方』をアップデートする」です。フォーラムの中で、このプロジェクトで指定した嶺南ふるさと学習研究推進校による実践発表があります。また、その実践発表に参加いただいた方々による『R-café』も予定しています。他にも、基調講演、嶺南事務所研究員の発表、特別支援教育・校内研修の充実・ＩＣＴ活用など様々な分野においての実践発表・話題提供がありますので、多くの方々の参加をお待ちしております。興味のある方は、嶺南教育事務所ホームページをぜひご覧ください。

嶺南教育事務所は、福井大学連合教職大学院の行政機関における拠点校として、平成20年から今日ま

で連携・協働を深めてきました。ここに紹介した「『嶺南ふるさと学習』推進プロジェクト」は、その連携・協働から育まれたものです。立ち上げの時から、教職大学院の多くの方々にアドバイスをいただき、所内の協働研究会や推進プロジェクト実行委員会の中で協議を積み重ねてきました。プロジェクトとしては2年目でまだ始まったばかりですが、今後も嶺南地域の学校・市町教育委員会とともに実践と省察を繰り返し、小学校、中学校、県立学校そして大学がさらに深くつながる中で、互いに切磋琢磨しながら成長していけたらと考えています。そして、嶺南地域の子どもたちがふるさとに愛着を持ち、これからの新しい時代を力強く生きる大人へと育っていくことを願っています。

インターンシップ・週間カンファレンス報告

知らない私、生徒との接し方に迷う日々

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立羽水高等学校

冨田　一葵

11月になり、今年も残すところ2ヵ月となった。私のインターン校では衣替えが終わり冬服への移行やストーブの到来に備えた教室内の席の配置換えが行われるなど、冬の支度が始まっている。昨年まで、山口県で過ごしていたため、エアコンが教室に設置されているのにも関わらず、ストーブまで備える必要がある福井の冬に恐怖している。

現在、インターン先として羽水高等学校にお世話になっているだけでなく、非常勤講師としても勤務

している。羽水高校では主に数学の教員として、日々授業見学や授業実践、校務分掌など色々と経験させていただいている。毎日てんやわんやになりながらも学びを深めていく中で、一つ困ったことができた。

授業における生徒、特に3年生との接し方である。そもそも私自身、コミュニケーションをとることを苦手としている。長い時間かけてようやくまともに話すことができるレベルである。羽水高校でも半年かかってしまったが、休み時間に世間話をできるようになり、最近では授業見学に行ったときに質問されることも増えてきた。しかし、それ故の問題が出てきた。その指摘があったのは 1 年生で総合的な探究の時間を担当しているクラスの生徒からであった。そのクラスには情報や数学の授業見学、SH 見学や実践など、色々なクラスにお世話になっている中でも、比較的入り浸っている。他のクラスよりも付き合いが長い分、関係が近い気もするが互いに言い合える仲である。そんなクラスの生徒から

「なんでいつも(見学に)来てるときと(総合の)授業中あんなにも雰囲気違うん？話し方とか特に」と言われた。

この言葉がずっと頭から離れていかない。似たようなことは他の学年でも言われたことがある。そのときは、クラス全体への一般的な説明や授業と生徒一人一人の考えや理解に沿える個別指導などで対応を変えていたのは意識して行っていたこともあり、話し方や雰囲気が変わることもあり得ると思っている。だからこそ、私の様子が見学と授業者とで違うという自覚が無いため、なんでだろうと考えさせられた。生徒が話しやすいのは見学時や個別指導時で、一方、授業では少しとっつきにくいらしい。未だに確信めいた答えは見つかっていないが、私自身、授業者としての立場になったとき、無意識に力を入れてしまう部分があるのだと考える。これからのインターンシップを通して、改善するべき点を見つけ出し、授業、休み時間問わず、話しかけやすい教員を目指していきたい。

そして、一番の悩みである 3 年生との接し方について書いていく。3 年生は言わずもがな、共通テスト、大学入学試験に向けてありとあらゆる力をフル活用し勉学に励んでいる。クラスは受験に向けての準備ができつつあり、ある種の緊張感も生まれているように感じる。そのような 3 年生たちとの接し方が分からない。現在、文系 2 クラスの数学を担当させていただいており、それぞれ週に 2、3 時間ほど授業をしている。しかし、この 2 クラスは数学を必要としている生徒がほとんどいない。1 クラス 30 人と仮定して、共通テストで数学を受験するのは 2、3 人程度、大学入学試験(二次試験)に必要とする生徒は 0。いわゆる私立文系に進学を希望する生徒たちが多いクラスである。生徒たちにとって、数学よりも他の主要教科や小論文の勉学に励んだ方が大学進学のためには良い。現在、共通テストに数学を必要とする生徒に対して授業を行っているものの、その他の生徒にどのように声掛けをするのかを迷っている。インターン先の先生方や大学院の先生方、先輩方、同期と相談しつつ、これからの私自身の授業の在り方や生徒との接し方について考えていきたい。

次に、金曜カンファレンスについて少しばかり書いていく。10 月以降インターン先での用事があったり、至民中学校での公開授業を参観したりと 2 週に一度出席している状態であり、金曜カンファレンスでの学びが飛び飛びであるが書いていく。現在、金曜カンファレンスではカントの「啓蒙とは何か」をめぐる資料を読み、現学習指導要領総則第 3 節教育課程と評価との関連性について話し合っている。自律と他律、現在の教育ではどちらが求められているのか、理性の公的使用と私的使用では何が違うのかなどカントの「啓蒙とは何か」から読み取るキーワードをもとに自身の経験と似た事例や互いの理解の確認を行なった。特に、実際に評価をつけている人からの評価の悩みを資料を基に考えた。また評価と一体化した授業とはという視点から公開研究会に参加して、互いの教科で見取ったことを共有しあった。実際の現場にて、私たちがどのように授業と評価を行っていくのかを今回の学習の学びを通して考えていきたい。

最後になるが、これからのインターンシップにて多くの悩みや課題、理解しがたい物事に直面すると思う。思考し、試行し、振り返りを通して、少しでも多くの学びを得ることができるインターンにしていきたいと思う。

授業実践をして気づいたこと

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

五十嵐　彩香

今年度のインターンシップが始まって、早 7 ヶ月が経った。今年度は昨年度から引き続き、附属義務教育学校の前期課程でインターンを行っている。昨年度と変わったことと言えば、配属された学年が異なることと、非常勤講師を兼ねていることである。昨年度は 5 年生に配属されたが、今年度は 1 年生のクラスに配属された。また、講師として 2 年生の算数と 6 年生の書写を担当することになった。主免教育実習では 6 年生のクラスに配属されていたため、今までに低学年の子どもたちと関わった経験がほとんどなく、上手に子どもたちと関わることができるか不安であった。実際に学校が始まると、高学年と低学年の子どものギャップに驚くことばかりであったが、それが面白くもあった。今回は、授業実践をする中で、特に低学年の子どもたちについて印象に残ったことをいくつか書き綴っていく。

一つめは、「高学年とは異なる予想外の発言」である。昨年度は、教材研究をして授業実践をしたところ、子どもの予想外の発言などに驚かされることはあったものの、全体的に授業として成り立っていた。しかし、今年度も同じように教材研究をして授業実践をしたところ、スムーズに授業が進まないことが何度かあった。5 年生と 2 年生を比較すると、予想外の発言の種類が全く異なっていたのだ。初めて 2 年生で授業をした際に、黒板に字を書いたところ「先生、どうやってノートに書くんですか？」と聞かれたことは、これからもずっと忘れないであろう一言となった。低学年はノートに字をどのように書くのかを順番に説明する必要があるのだと衝撃を受けた。しかし、それは子どもの発達段階や経験を踏まえると当たり前のことであり、算数の学習内容ばかりを研究するのではなく、子どものことをもっと知らなければならないのだと思い至った。とは言え、子どもたちは毎回の授業でノートの書き方を質問してくるわけではない。夏の終わり頃には、黒板に書かれた字をノートに書くだけでなく、他の人の考えをノートに書いたり、私がさらっと授業中に言ったことをメモしたりする子が増えてきた。だんだんと自分で、何を書けばよいのか、どのように書けばよいのかを判断することができるようになってきたのである。たった数ヶ月ではあるが、子どももしっかり成長しているのだなと感じた。

2 つ目は、「子どもの持つ素朴な疑問」である。低学年の子どもたちは、良くも悪くも素直であり、思ったことを直ぐ言葉にする。ある日の長さの授業中、「㎝は長さの単位です」と言ったところ、「先生、単位って何ですか？」と聞かれた。「単位とは何か」を今までじっくりと考えたことは無かったため、とてもドキッとした瞬間であった。また、テープ図の学習では、「図って何ですか？」と聞かれた。さらに別の授業では、「部分って何ですか？」と聞かれたこともあった。どれも反応に困った質問である。大人は当たり前に使っている言葉でも、子どもにとっては初めて出会う言葉がたくさんある。授業中にその言葉の意味について、2 年生に伝わるように上手く言語化できずに悩むときもあったが、この経験が何度かあったからこそ、授業を作る際にだんだんと低学年の子どもがどこに疑問を持つのかが見えてくるようにな

った。低学年の子どもたちが口にする素朴な疑問は、これから算数を学んでいく上でとても重要なものがほとんどである。子どもの素朴な疑問を適当に流してしまうのではなく、現段階で子どもたちが納得いくような返しができるように準備をしておく大切さを学んだ。

今年度も残り 5 ヶ月である。子どもたちが成長したように、私も少しは成長しただろうか。大学院 1 年目の初めに書いた自己紹介のニュースレターでは、*「楽しいだけの授業ではなく、楽しく学びの深まる授業をするには何が必要なのかを実践を通して考えていきたい。」*と書いていた。昨年度は、高学年の授業実践で「グループワーク」に注目していたが、ただグループワークをするだけで学びが深まるわけではない。今思えば、子どもたちはグループワークをする中で、互いに疑問を口にし合い、その疑問を解決していく中で答えを導いていく姿が何度か見られた。そして今年度、2 年生でも多くの子どもが「疑問」を持ちながら授業に取り組んでおり、私はこの子どもの持つ疑問をもとに授業を展開することを意識してきた。疑問を解決するにあたり、子どもたちは今までに学習したことと繋げようとしたり、日常生活での経験と繋げようとしたりしており、グループワークをしなくても学びが深まることはあるのだなと実感した。あくまでグループワークは、学習手段の一つであり、適切なタイミングで取り入れたり、進め方を工夫したりすることで学びが深まるのではないかと考えた。今年度の 2 年生の授業実践では、あまりグループワークを取り入れることができていないため、残りの 5 ヶ月で低学年における適切なグループワークのタイミングや、その進め方について検討し、「楽しく学びの深まる授業」の在り方を引き続き模索していきたい。

ここまで、参観者として見る授業と授業者として見る授業の 2 つの視点から自分の学びを省察してきた。金曜カンファレンスの 2 の時間では、「評価」をテーマに、今求められている教育や身に付けるべき力について様々な資料を検討しながら議論を重ねている。このように、自分自身のインターンシップでの学びと関連付けながら理論的な内容について語り合うことは、私の中にある「先生像」「学校像」「教育像」を今一度考え直す機会へとつながっている。少し立ち止まって考える時間のある今、当たり前のように捉えているものを改めて問い直し、自分の言葉で話すことができるように、同期や先輩、先生方との語り合いを大切にこれからも学び続けていきたい。

進み始めた岐阜拠点の週間カンファレンス

授業研究・教職専門性開発コース2年/岐阜聖徳学園大学附属中学校　岩瀬　夢有人

私は今、岐阜拠点の５人で新たな「週間カンファレンス」のカタチを創り上げようとしている。しかし、福井のカタチのように初めから上手くはいかなかった。岐阜の５人でどのように１から「岐阜」の週間カンファレンスを作り始めたのか。また、その中でどのような学びを生み出していったのか。それについて、この記事で書いていく。

まず、昨年度までの私たちの週間カンファレンスについてお話する。私たちは岐阜から初めてのストレートマスターであったため、岐阜独自の学びをどう取るのか、昨年度はひたすら岐阜のストレートマスター4 人で週間カンファレンスの在り方について考え、実践してきた。はじめは、隔週で福井との金曜カンファレンス（オンライン）の参加と岐阜拠点の木曜カンファレンスを合わせて行っていた。隔週で福

井の金曜カンファレンスに参加していたのは、福井ではどんなトピックをこの「週間カンファレンス」の時間で学ぼうとしているのか、学生中心にカンファレンスを運営するノウハウはどんなものか、福井のメンバーとの交流など様々な理由があった。岐阜だけでやっていては思いつかないようなアイデアや発想、提案なども、福井ならではの意見などもあり、とても充実した時間を過ごせた。しかし、すべて良いこととは限らなかった。隔週で岐阜と福井をオンラインでつなげるために、今までなかった機器の準備が増えたり、隔週で金曜カンファレンスに参加することで、岐阜のメンバーは福井が金曜カンファレンスで行っている取り組みが少しずつしかわからず、今何を取り組んでいるのかが明確にわからないまま金曜カンファレンスに参加するということになっていた。福井の金曜カンファレンスのことも考えつつ、自分たちの岐阜の木曜カンファレンスもやっていかなければ、、、という気持ちで、充実したカンファレンスはあまり行えなかった。そこで、昨年は福井のような週間カンファレンスを自分たち岐阜でもできるようにということで、福井で行われている取り組みをどんどん岐阜に取り入れるようになった。最初岐阜では、大きく２つの話題で進めていた。１つは、毎週の連絡事項の共有、もう１つは、今週のインターンの振り返り。しかし、それだけでは毎週の振り返りをしているだけ、また担当教諭からは「教科」の力が足りないことを指摘して頂いた。自分たちは、インターンでどんなことがあった、こんなことを感じた、という振り返りばかりだった。そのご指摘をうけて、私たちはそれぞれ自分の「教科」に対して力をつけようということになった。そこからは、①毎週の連絡事項の共有②インターンの振り返り③自分の教科の学び、というようにテーマが２つから３つへ変化していった。この変化によって、私は自分の専門教科のことをあまく見ていたことを実感した。これまで、「教科」のことについて深く考える機会はなく、なんとなくの感覚で授業を創ってきた。でも、この「教科」について知る機会を岐阜の週間カンファレンスで行うようになって、岐阜のメンバーはますます自分の担当教科に対して考えるようになった。これからは、２年目の岐阜の週間カンファレンスについて書いていく。

今年度 2 年目の週間カンファレンスは、昨年度とは大きく変わった点がある。それは、福井との隔週で行っていた金曜カンファレンスに参加することをやめたことである。今年度からは、毎週岐阜で週間カンファレンスを行うようにした。また、今まではインターンの振り返りや連絡事項の共有などで、これを週間カンファレンスでする、というものはきちんと決まっていなかった。そこで、２年目からは、１の時間「連絡事項の共有」２の時間「実践の振り返り」３の時間「本を読み、考察する（学習する組織）」と行う内容を決め活動を始めた。これは、初めから岐阜ではこうやっていこうというようにスムーズに行う内容が決まって進んだわけではなかった。岐阜拠点として週間カンファレンスを創り上げていくうえで、スムーズに進めるためにとても助かったのは昨年の隔週で行った福井での金曜カンファレンスである。私たちは、昨年何気なく参加していた金曜カンファレンスからカンファレンスを運営するための知恵やノウハウを学んでいたのだ。それがあったからこそ、今のような岐阜の週間カンファレンスを創り上げることができたと思う。今では、１の時間「連絡事項の共有」２の時間・３の時間「長期実践報告書の交流・作成」を行っている。岐阜拠点という場所は、人数が少ない。そのため、福井のような大きな取り組みをすることは難しいかもしれない。しかし、岐阜は少人数だからこそ意見がまとまりやすく、少人数だからこそ週間カンファレンスで行うことを変更することが可能になる。臨機応変に対応していけるところは少人数の岐阜拠点ならではの良さである。これからも、岐阜拠点ならではの強みを生かした週間カンファレンスを創り上げていきたいと思う。

教師という仕事

授業研究・教職専門性開発コース１年／坂井市立丸岡南中学校　原 智徳

本大学院に入学し、はや７か月経過した。この７か月間という期間は自分にとって「教師」という仕事のイメージを変えるものとなった。

私は４月よりインターンシップとして、坂井市立丸岡南中学校にお世話になっている。本校は、教科センター方式とスクエア制を採用した、比較的新しい学校である。本校の雰囲気は、自分たちが教育を受けてきた学校と異なり、主免教育実習を行った附属義務教育学校ともまた違うものであり、とても良い経験となっている。また、今まで教科センター方式やスクエア制というものを知らなかった私にとって、新たなことを知ることができる良い機会となった。そんな環境の中で、自分が考えてきたことを以下に述べていきたい。

まず、大学院入学前の私（学部時代）は、教師は「授業の中で生徒を成長させる仕事」であると考えていた。これは主免教育実習の影響が大きい。主免教育実習では、約３週間の中で授業を作り、実践するということがメインとなる。そのため、授業の中だけで生徒を成長させるという教師のイメージを持っていた。もちろん、授業の中で様々な力を身に着けさせ、生徒を視聴させることは重要であるし、主免教育実習ではその点を多く学ぶことができた。しかし、インターンシップを経験し、授業の中だけで生徒を成長させることは難しいと感じるようになった。これは、生徒の成長についての定義が異なるため、一概にはいうことができないかもしれないが、私はそう感じた。これを感じた大きな原因は、生徒と接する時間が増えたことと、実際に働く教師を間近で見たことが考えられる。教育実習では、自分の担当教科や見たい授業の時などに教室に行って、それ以外は教生控室で待機している場合がほとんどである。そのため、職員室などに入る機会は少なく、実際に働く教員の姿を見る機会は少ない。しかし、インターンシップでは教員として職員室に入り、先輩教員の仕事の様子や生徒との関わり、教師同士の会話などを見聞きすることができる。これによって、先輩教員がどのようなことを考えながら活動しているかということや、日常でどのような課題や問題があるかということを知ることができた。そのような課題や問題は、授業中だけが原因ではなく、様々な要因が関係している。そのことを授業中の断片的なことだけ指導しても意味がない。相互に関係している問題を、それぞれの場面で指導し、解決していかなければならない。私は、実際の現場に関わることによって、これに気付くことができ、このような考え方に変化した。

次に、教師の仕事について、今まで知らないことや表には見えなかった仕事を見ることができた。特に感じたことは、放課後の仕事と学校行事の準備である。放課後の仕事として、部活動や職員会議、学年会議、指導案検討などがある。部活動では、教員側として参加することは初めてであったため、指示や指導の仕方、練習メニュー、指導する度合いなど、生徒との距離感をつかむことが非常に難しかった。しかし、指導側として立つことにより、貴重な経験ができたと感じる。また、今まで参加したことがなかった職員会議や学年会議に参加するようになったが、先生方が生徒の様子を共有したり、注意事項などを連絡し合ったりなど、教員同士の協働について知ることができた。また、それに伴って、学校行事の数か月前から長い期間準備や検討を重ねて学校行事が行われていることを知ることができた。特に、準備や片付けにおいて、生徒が行う部分はほんの一部で、教員が行っていることが非常に多いことが分かった。最後に、指導案検討では、一つの授業に対して多くの人の考えが含まれ、みんなで作り上げるという姿勢が見られた。このように、生徒や周囲から見えない部分というのが、インターンシップによって見えてきたように感じる。

また、教職大学院では、カンファレンスによって、他の方々によるこれらの経験を知ることができる。自分に似た経験や事例を知っており、その対策や対応についてヒントを知っている人も多い。そのような面で、カンファレンスを活用し、自分の成長につなげていきたい。

まだまだ未熟ではあるが、約 1 年半後の教壇に立っている姿を見据えて、本大学院で成長していきたい。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

連合教職大学院で学ぶこと、気づき、省察、試行錯誤
～これまでを振り返って～

学校改革マネジメントコース２年/沖縄県宮古島市立狩俣小学校　下地　美和子

福井大学連合教職大学院に入学して 2 年目、これまで校種や職種、年齢や立場を超えた方々と関わることが出来多くのことを学んでいる。院に通い始めた頃は、宮古島からの初めての院生で情報が殆どなく、かなり緊張していた。そういう中でのあるカンファレンスで、私自身の中ですとんと落ちたキーワードが「自己開示」であった。その大切さや、先生方の優しさや仲間意識を知り、安心して「自己開示」できる環境の居心地の良さを感じながら慣れていくことができた。その環境をつくる院のシステムや先生方の配慮、福島先生のマネジメント力に感心した。院でのカンファレンスやラウンドテーブルで、様々な実践や意見を聞きながら、自分を振り返ったり、その先生の課題に対して解決策はと色々考えあぐねたりする。そういう中で視野が広がり、キーワードとなる視点をもって学校の課題へ対応する。うまくいったりそうでなかったりであるが、院では多くのことを学んでいる。

私の勤務地、児童数 20 名の宮古島市立狩俣小学校では、「地域に開かれた学校」として地域連携を深め、児童の自己肯定感を高める学校づくりを目指して取り組んできた。昨年度前校長と一枚岩になり、地元出身の教師を含めた教職員に恵まれ、本校での地域連携を充実させることが出来たことはとても有り難いことであった。今年 5 月のカンファレンスで、幼稚園の再開を紹介させていただいたが、なぜ学校がここまで地域連携に力を入れるのかと不思議に思った方もいたと思う。そこまで地域と関わらなくても学校現場の活動は十分成り立つ。ではなぜ地域連携にこだわるのか。要因の一つとして過疎化がある。本地区では過疎化が深刻な課題で、狭い宮古島でも学校の統廃合の波が押し寄せている。私が 30 年間勤めてきた島内 10 校の学校の中でも現在 3 校が廃校になっている。中央に人口が集中し、周辺の地域は、今後学校が閉校となる可能性は否めない。全国どこでもいえるとは思うが、宮古島も小さいながら、各地域に独特の貴重な文化が存在しており、地域に学校がなくなると地域は廃れる一方で、その文化自体の継承もなくなってしまう。この地元の出身である私には、子ども達の後ろにいる保護者（正確に言うと祖父母）

や地域の方々の顔（もちろん全員とは言わないが）や願いが透けて見える。子ども達や保護者や地域、学校にとって、なにが Well-Being ！？ になるのだろうか？と考えると、子どもが地域の価値を知ることであった。素地はそろっている。学校と地域の連携のもと、子ども達が地域のよさを理解し、地域の方々は子ども達の成長を見守る。優しく穏やかな狩俣の方々と学校が協力しあえば、必ず子ども達にとっても良くなると確信し、「互恵関係～ウインウイン」というキーワードを引っ提げて地域連携に取り組むことができた。

学校存続の課題を頭に入れながらも、やるべきことは目の前の子ども達が、地域に誇りを持つ為に、地域のひと・こと・物に関わり、どう心豊かに学んでいくか、学びを通して地域の良さや魅力をどう理解していくかである。昨年は、探究的な学習の取り組み方など、福島先生や大学生、院生の仲間から多く学ぶ事が出来た。福島先生は「素材がいいから良い物が出来ます」と話して下さった。地元にどっぷりつかっていて自分たちでは気づかなかった点や地域の良さを改めて理解する、別の観点から見ることの大切さ、他者からの価値付けで、視点を変え学ぶ事が出来た 1 年であった。

また令和3年にコロナ禍で出来なかった「宮古島ラウンドテーブル」が、令和 4 年には「NITS と福井大学連合教職大学院との協働コラボ」としてレベルアップし、開催する運びとなった。これは福井大学連合教職大学院、そして東京サテライトの福島先生がいらしたから実現出来たことであり、離島が故の、そして色々な課題のある中での、発想の転換、強い意志、周囲への配慮等など、マネジメントの素晴らしいお手本を見させていただいた。頭が下がる。当日私は残念ながら参加が叶わずご迷惑をかけてしまったが、多くの先生方が参加し、ラウンドテーブルの素晴らしさを宮古島の先生方に体験してもらう絶好の機会となった。宮古島ラウンドテーブルが実施できたということは、宮古島の教育にとっては大変大きな一歩であった。この場を借りて関わってくださった福島先生、大学院の先生方、院生の皆様、実践報告をしてくださった皆様、宮古の運営に関わった先生方、参加してくださった皆様、支えてくださった皆様に感謝を伝えたい。本当に有り難うございました。

今年度学校では、「地域連携」も継続しながら、特別支援の課題等にも取り組んでいる。先生方との対話や、理論書から色々なヒントをいただきながら課題や自分と向き合い、試行錯誤している。時には喜び、時には落ち込みながら、その中でほんのちょっぴりではあるが自身の成長も感じ、心豊かに学べることに喜びと有難さを感じる。

自分の置かれている環境に感謝しながら、さあ、明日もまた元気に学校へ行こう！

願いから行動へ

ミドルリーダー養成コース１年/岐阜聖徳学園高等学校　水谷 雅典

教職大学院で学び始めて半年が経過した。カンファレンスで多くの先生方から実践に対してアドバイスをしていただき、日々新しいことに挑戦する勇気をいただいている。

私は、生徒が過ごす高校 3 年間は、子どもが大人から存分に学ぶことができる最後の砦だと思っている。この 3 年間で、勉強だけでなく今後力強く生きていける力を身につけてほしい、そうなるような時間や場を作りたい、そのために、その時にできる最善の手を尽くしたいと思いながら勤めている。また、自分の担任クラスや授業担当クラスだけでなく、他の学科コースも含め、生徒や先生同士で高め合っていけるようになりたいと思う。

このような理想に近づくにはどうしたらよいだろうか。教職大学院に進学する前は、これらを実現するには、管理職の先生方や学校の中で重要な役職についている先生方がリーダーシップを発揮し、目指す方向を決め、実現させる方法を考えるべきだと思っていた。さらに、本校が生徒募集で危機的状況にあったり、生徒の進学に対する見方が変わらないのは、「これまで勤められてきた先生がこのような状況を作り出したからだ」とさえ思っていた。今思えば、無責任で恥ずかしい。

学校を変えていくには、管理職のリーダーシップやシステムが重要なのは当然だが、全ての問題を解決できるわけではない。

では、具体的に私にできることはなんだろうか。理想や願いをもっていても、生徒や学校は変わらない。そこで今年度、私は食わず嫌いせず、とにかく行動し挑戦し、できることは何でも取り組むようにしている。

これまでは、決められた行事以外で外部や地域と連携して何かに取り組んだり、生徒を外に出して学ばせたりすることをほとんどしてこなかった。生徒は主に、日々の授業と放課後の課外授業、部活動だけで完結しており、外に出て刺激をもらったり、課題を発見して解決に向けて取り組んだりする機会がなかった。そこで今年度は、総合的な探究の時間や放課後を使い、生徒を積極的に企業や公的機関へ出かけさせ、学びの場を広げさせるようにしている。実際に見たり体験したりする中で、新たな課題を発見し、次々に活動していく生徒も現れてきた。また現在は、生徒が探究活動のつまずきを相談できる場や英語を使う場として、フィリピンの高校とオンラインで繋がることも計画している。このように、「こんなことをやりたいなぁ、こんな風になったらいいなぁ」を実際に行動に移すようにしている。初めは私自身、どのように企業等とつながればよいか分からなかったし、怖さもあった。しかし、ダメもとで電話やメールでお願いをし、管理職の先生方に許可してもらうようにしている。幸い、本校の管理職の先生方は、生徒が外に出て行くことに対して寛容なので本当に助かっている。

また、こうした取り組みが自分だけのものとならないよう、教務部の総合担当の先生に共有するようにしている。共有する時間を頻繁に作ることで、「ここから数年は、全職員で探究活動に重点的に取り組んでいこう」という話ができるようになってきた。また、他校の視察に一緒に出かける機会も増え、探究活動の充実に向けて着実に前進している。

少子化が進む中で、本校が危機的状況にあることに変わりはないが、幸いまだまだ私たちにできることはたくさんありそうだ。できることはすべてやっていこう。願いをもって行動し、学校を、目の前にいる生徒を変えていこう！

まずは自分が動かねば！

学校教育目標達成に向けたマネジメント

学校改革マネジメントコース１年/若狭町立瓜生小学校　前田　浩尚

教職大学院に入学し、半年がたった。私は学校改革マネジメントコースの１年履修なので教職大学院で学ぶことができるのも残り半年となってしまった。少しずつ先が見えてきて寂しい思いが募っている。教職大学院の先生方をはじめ、さまざまな地域、立場の先生方と出会い、互いの実践について語り合ったことで、自分の視野が広がりつつあることを実感している。また、教職大学院に入学するまでは、与えられた仕事をひたすらこなしていた自分が、省察の機会を得たことは非常に大きい。これまでの取り組み

を省察し、文章に書き綴ることで私の強みや弱みを知ることができた。自分の強み、弱みを知ることでこれまで以上に目的を意識した取り組み、職員を巻き込んだ取り組み、プロセスに焦点を当てた取り組みを意識できるようになってきた。

今年度、私は研究主任として学校の研究を推進する立場となった。教職大学院での学びを生かし、どのように研究を進めているか取り組みの一部を紹介したい。

① ベクトルをそろえる

今年度の研究テーマは学校教育目標と同じ「社会の中で自分らしく生きる資質・能力を育てる」である。そして、育成したい資質・能力を自立・協働と設定している。学校教育目標について昨年度の学校評価を見ると内容が抽象的で、具体的にどのような力を育めばよいのかがわかりにくいという反省が見られた。児童に育みたいと思う力がそれぞれでは取り組みがぶれる。本校に関わるすべての人のベクトルをそろえることで大きな成果を生み出すことができる。そう考えて年度初めに職員のベクトルをそろえることから取り組みをスタートさせた。管理職の協力を得て保護者と地域の方に向けたアンケートの結果も参考にしながら職員で児童につけたい力について対話をくりかえし、自立・協働を具体的にした行動指標を作ることができた。

② 学校教育目標達成にむけたアプローチを作成

次のステップは、行動指標を育成するため、具体的にどのように取り組みを進めていくとよいのかということである。職員が集まり、どの場面で行動指標の育成を図ることができるか話し合った。そうすると、話し合いや振り返りなど教育活動の中でどのような仕掛けをするかということについての意見が多く出た。そこで、学校教育目標の達成に向けて行動指標を軸に様々な行事や授業場面で「見通す」「活動する」「振り返る」のいわゆる AAR サイクルをまわしていくことで１年間を通して学校教育目標を達成しようと考えた。職員との対話を通して完成したのが教育活動、授業場面における非認知能力育成のアプローチである。

③ みんなが省察する

②にあるように自立する力・協働する力といったいわゆる非認知能力の育成は、授業はもちろん、学校の教育活動全般を連動させながら育成することが大切だと考えている。いろいろな活動を関連させるためにとっている手立てが省察である。本校では児童も職員も全校を上げて振り返りを大切にしながら取り組みを進めている。児童は授業だけでなく行事の後にもプロセスに焦点を当て、自身の非認知能力がどの場面でどうなったかを振り返ることで次の活動に生かしている。職員は児童の見取りや振り返りをもとに対話し、次の活動に生かしている。本校では学校教育目標の達成、自身の成長のためにすべての人が見通し→活動→振り返りのサイクルを繰り返しているのである。

取り組みを初めて半年、教職大学院での学びを生かし、職員の協力を得ながら少しずつ前に進んでいることを実感している。見通しを持つ→。取り組む。→うまくいかないときには立ち止まって省察、カンファレンスでの対話を通して問題点をクリアにする。→取り組みを改善する。このサイクルが実に面白く本当に充実している。残り半年で一区切りとしなければならないのが本当に残念である。

人と人とのつながりを求めて

ミドルリーダー養成コース１年/岡谷市立川岸小学校　藤森　香織

この 15 年間ただがむしゃらにひたすら走ってきただけのような気がする。振り返って思うことは、「特に語れるようなことがない 15 年間だった」ということだ。何か大きな取り組みをしてきたわけでもないし、責任のある校務分掌を任されてきたわけでもない。本当に何もない。だからこそ、何もなかった 15 年間をていねいに思い出し、振り返る「省察」が必要である。ただがむしゃらにひたすら走ってきた 15 年間に価値を見出せるように、その時その時のことをとらえ直して、自分のものとして蓄積していきたい。そんなことを思って教職大学院に入学した。

教職大学院に入学して半年。この半年間、学校の仕事と並行して、カンファレンスで自分の実践を振り返り、語り、次への展望を持ち、実践し、振り返り、語り、次への展望・・・を繰り返してきた。教職大学院での学びは、「語り合い」だ。私自身、人前で話すことが苦手でそのような場はなるべく避けてきた。しかし、初めて参加したラウンドテーブルでは、これまでの自分の取り組みについて 40 分ほど語るという試練がやってきた。「40 分も語ることがない・・・」と何を語ればいいかわからず、不安でいっぱいだった。なんとか資料をつくり自分の取り組みを話したが、やっぱりだんだん何を言っているのか、何を伝えたいのかわからなくなってしまった。しかし、一緒のグループの先生方はうなずきながら肯定的に聞いてくださり、私の取り組みを価値づけてくださった。自分の考えていることを言葉にすることで見えてくるものがあることを知ったし、たとえ、話がまとまらなくても、話を聞いてくれる人がいて、答えてくれる人がいて、それがこんなに楽しいことなんだということにも気づいた。さらに、様々な業種、年代、役職の方がいて、みんなそれぞれだけれど、教職大学院で学んでいるということでいえば「仲間」なのである。今まで私は常にだれかと比べていて、「自分はできていない。いいことも言えない。深い読みができない。」という劣等感のかたまりで、後ろのほうにいる人間だったので、「仲間」という中で劣等感を感じることなくいることができる教職大学院の場がとても嬉しかった。これは、教室でも同じことが言えるのではないか。「自分の考えを話そう。」「友達が言ったことに反応しよう。」「友達の考えを聞いてもう一度考えよう。」私が授業でよく言っている言葉だ。友達が自分の考えを聞いてくれる。うなずいてくれる。反応してくれる。だから安心して話すことができる。人と関わり合いながらの「学び」は楽しいものなのだと改めて思った。そして、やっぱり私は、学ぶことが好きなのだ。このラウンドテーブルで感じた「学ぶことが楽しい」ことを子どもにかえしていきたい。それが教職大学院で私が学んでいる意味だと思う。人と関わり合いながら学び、省察を繰り返しながら、さらに、子どもの学びを深める授業のあり方や教師間の協働について追求していきたい。

職場ではどうかというと・・・何もできていない自分がいる。採用されたのが遅く、ようやく初任研 2 年目を終えたばかりの私に、学年主任だ、研究主任だなどとまさに「ミドルリーダー」としての役割を与えられても、何をどうしていいかわからず、今まで以上に自分の力のなさを痛感する毎日だ。「私が今まで大事にしてきたものは何だったか。」「この指導が目の前の子どものためになっているか。」正直、自分を見失っている。さらにそこへ「学校全体の学びはどうあるべきか」「先生方の学びとは」ということについても考えるようになり、資料を読んだり、インターネットで調べたり、先輩の先生に聞いたり、それでも全然追いつかない。教職大学院での学びである「語り合い」を学校現場でも大切にしなければならないと思う。

私の教職大学院の学びはまだ始まったばかりだ。貴重な学ぶ機会を与えていただいたことに感謝するとともに、この学びをいつか子どもや先生方におかえしできるように、学び続ける教師でありたい。

話し合いを通じて学び合う

学校改革マネジメントコース１年／越前市吉野小学校　武藤　基彦

『問題についてグループで話し合うといろいろな意見が出てきておもしろいです。』『僕一人では気付かなかったことをグループの人が言っていて気付くことができました。』

これは、毎日クラスの子どもたちに書かせている「振り返りノート」に書かれていたものである。コロナ禍も落ち着きを見せ、話し合う活動ができるようになってきた。

今年 5 年生を担任している。明るく活発な子どもたちだ。今まで担任してきたクラスでこれだけ話し合い活動を重視したことはない。なぜ話し合い活動を多く取り入れるようになったかというと、教職大学院で学び始めたからだ。毎回のカンファレンスで、自分の考えていることを話す、それに対して様々な意見を言ってもらう、自分の考えが広がる、ということを体験してきた。この体験を子どもたちにも味わってほしいと思い、自分のクラスでも「なんちゃってカンファレンス」と題して話し合い活動を取り入れている。子どもたちは、「カンファレンス？」って驚いていたが、毎回のカンファレンスの後に、朝の会で話すようにし、「誰かから教えてもらうんじゃなくて、学び合うようにしましょう」と子どもたちに伝えた。すると、「何かおもしろそう」「大学院生と同じことしてるんや」とまんざらでもない様子で、意欲的に話し合い活動に取り組むようになった。最初は興味本位だったようだが、話し合い活動を通して、自分の考えを話すだけでなく、他の人の考えも知りたいと思うようになってきた。子どもたちの姿が変わっていくのを見ると、教職大学院で学び始めてよかったと感じている。私自身が体験し学んだことを子どもたちに還元できているのを感じる。

教職大学院で学び始めて早くも前期が終わり、後期に入った。「若手同士をつなぐ」「若手とベテランをつなぐ」ということを目標に実践を始めた。

「若手同士をつなぐ」ために、4 月から教育実践上の悩みを言い合う場としてお悩み相談会を始めることにした。初回は、どんなことを悩みにしているかをお互いに聞き合う場とした。若手が 6 人いたが、抱えている悩みは人それぞれ。何か 1 つを絞って話し合うということが難しいように思われた。今思うと悩みを 1 つにまとめようとしたのが失敗だった。それから個別に話を聞くことはあったが、お悩み相談会はうまく機能していない。夏期集中講義で『コミュニティオブ・プラクティス』を読み、実践コミュニティの設計が上手くできていなかったことが原因だと理解した。お悩み相談会というコミュニティを作ろうという試みは失敗に終わった。まずは、コミュニティを構成する若手教員一人一人とじっくり話すことが大切だったと今になって思う。けれど、コミュニティを作ってみようという試みがなければ、成功も失敗もない。手痛い失敗だったが、教職大学院で学んだことを生かしてお悩み相談会を再起動できたらと考えている。

「若手とベテランとつなぐ」のは、もっと難しさを感じている。研究主任として多くの授業を参観する。ベテランの先生方の個を生かしながらも集団をまとめる力、授業構成力、子どもへの対応の仕方など、参観していてすばらしいなと思う。このベテランの力を若手教員にどう伝えていくかが研究主任として大きな課題である。また、若手教員の ICT を使いこなす力は、私からすると「えーこんなことできるの。」と驚かされてばかりである。ベテランが若手に教えるという一方的なものではなくて、ベテランも若手に教えてもらうような双方向的な教員の学びになるように、校内研究を構築していきたいと考えている。考えているだけで具体的な方策が思いついているわけではないので、これから教職大学院でそれについても学びを深めていきたいと思っている。

学校改革マネジメントに必要な資質

学校改革マネジメントコース１年履修／福井市社中学校　北村　英之

教職経験 20 年を過ぎたころから、「10 年後、またその先、自分はどんな教師になっているのだろうか」「今のような形で 10 年後も生活しているのだろうか。」「今よりもスキルアップしていかないといけないのではないか。」このように、自分の今後の教師としての在り方を考えるようになった。そんな折に、県のマネジメント研修を紹介され受講することとなった。この研修では、現在の教育界の情勢、福井県の教育について学ぶことができた。また、教職大学院の夏と冬のサイクル、ラウンドテーブルへの参加も盛り込まれていた。この教職大学院での事前履修を経験できたことが、学校改革マネジメントコースで学びたいという決意に繋がった。

第一に刺激を受けたことは、自分自身をふりかえることである。これまでの自分が実践してきたことは、自分のことなので記憶に残っているし、過去の実践の積み重ねの上に、現在の実践があると思っていたので、今回の様に振り返るということをした経験が無かった。夏のサイクルに参加し、先輩院生の長期実践を読み、じっくりと自分を振り返る時間をいただいた。振り返ることで、他の忘れていたことも付随して思い出すこともでき、客観的に見つめなおすことができた。また、同時に、今まで関わってきた生徒や、お世話になった先生方など、多くの出会いがあり、多くの人に支えられてこの歳までやってくることができたのだなとつくづく思った。

第二の刺激は、様々な校種、教職経験年数の方々と語るという刺激である。この「語る」という経験は、今までやってきていそうで、やっていない活動である。同じ学校の職員だと、何となく、「この先生はこんな授業実践をしている」と思ってしまい、分かった気になってしまっていることが多いと思う。教職大学院でのグループセッションでは、先生方それぞれが、どのような意図で、どのような実践をしてきたのかうまくまとめられた形で聴くことができる。このため、自分自身の振り返りにも、先生方それぞれの考え方は参考になった。そして、先生一人の報告に対して、同じグループの複数の先生方から、それぞれの立場からの意見や考えが出される。このことも、視野が広がり、多角的に物事を捉えることにつながっていると思う。こうした経験ができたことで、「さらに学びたい」、「これまでの自分よりも成長した自分になりたい」と思い、教職大学院の学校改革マネジメントコース 1 年履修で学ばせていただくことになった。

「特別支援学級における探究学習」「校内の特別支援体制の構築について」という 2 つの研究テーマを掲げて学校での実践を始めた。4 月からのカンファレンスでは、毎回、院生や大学の先生方との出会いがあり、先生方からの実践報告を聞かせてもらい考えることができた。

本校での実践についてであるが、今年度初め自分自身は、教職大学院での事前履修の経験、20 年を超える教職経験があるため、特別支援学級の担任が 2 人異動など大きく環境が変わった今年度も、「自分はやっていける」と高をくくっていた。4 月から 7 月、特別支援学級での授業実践（学習発表会）や、校内の特別支援体制構築のための取組み（事例研究会）が順調にいっていると思っていた。しかし、徐々に生徒指導上の問題が出て、学級運営の部分でうまくいかないことが増えてきた。問題が起きる度に、問題が起きた原因を、関係した生徒であったり、保護者であったり、その生徒の担任であったりと、周りの所為にしていた。大学院で学んだはずである、「協働」「語り合い」これらは、組織運営上大事なことである。しかし、自分自身が、現場では学んだことを全く生かすことができていないことを痛感した。学校をマネジメントする前に、自分自身の甘さを払拭し、同僚先生と相談しながら、1 か月以上先を見通した実践の計画や準備

を行うなど、特別支援学級のマネジメントに時間をかけてしっかり取り組み、立て直していきたいと思う。「マネジメントに必要な資質」を学校での実践や大学での活動の中で考え続けたいと思う。

今後も、いろいろと迷うことやどうしたらよいのか悩むことも多いと思うが、院生のみなさんや先生方に教えていただきながら、少しずつ前進していきたいと思う。どうぞよろしくお願いします。

10 月カンファレンス報告

多様なメンバーと「対話」することのおもしろさ

ミドルリーダー養成コース 1 年履修/福井大学附属義務教育学校前期課程

五十嵐　浩介

夏の集中講座を終えての久しぶりの合同カンファレンス。私はオンラインで参加することが続き、対面で参加すること自体も久しぶりであった。福井大学の会場に着くと、どことなく落ち着かない自分がいた。どんな先生と同じグループなのだろう？どんな話をすればいいのだろう？そんなことを考えながら講義室に入った。ほどよい緊張感に包まれながら、挨拶を交わす。オンラインでは味わえない目の前に相手がいることのワクワクとドキドキを今でも覚えている。

オリエンテーションでは、足羽第一中学校の道場先生が「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」ことについての実践事例を紹介してくださった。オンラインによる授業や行事などの配信に向けて、若い世代の先生と協力し、そして、その輪が広がっていきながら成果を上げたこと。職員室での教師同士の会話を大切にして、教師のつながりを強くしたこと。どの実践事例を聞いても、コロナ禍によって希薄になってしまった人間関係（教師と子ども、教師と教師）をもう一度、強く太くするために必要なことだと感じた。

自分自身はどうだろうか。私が勤務している学校は「研究」に重点を置いている。新しく赴任された先生にとっては戸惑うことも多く、もちろん、私も同じようなことを経験してきた。その状況の中で孤立させることだけはしてはいけないと決めている。普段の職員室では「最近どうですか？」と授業や実践について気軽に話せるように声掛けをしている。また、放課後には『部会』と呼ばれる同じチームの先生たちとそれぞれが取り組んでいることを紹介し合ったり、疑問に思っていることを出し合いながら、研究の方向性を明確にしていったりすることに取り組んでいる。何よりも大切なことは、「チーム」として機能することである。年齢や立場を超えて、対等な関係で全員が話し合える場をつくり、難題に立ち向かうために教師同士も協働することを大切にしていきたい。

午後のグループセッションは「自分自身の実践の挑戦を語る」がテーマであった。私のグループには、ストレートマスターの先生が多く、その話を聞きながらグループメンバーと「対話」することがとてもおもしろく、充実した時間であった。義務教育学校の前期課程でインターンをしている先生は、実は私自身がメンターとして関わっている。同じ学校で過ごしてはいるが、教職大学院の場で話すことは新鮮で、実践の話を聞きながらその姿が目の前に浮かんでくるようであった。私の授業を参観しながら自分の授業

と比較したり、そこから次の授業を考えたりと試行錯誤をしている様子がうかがえた。タブレットにはたくさんのメモが書かれており、よりよい学びを実現しようと試みていることがうれしかった。

岐阜聖徳附属小学校でインターンをしている先生の実践は刺激的であった。専門ではない音楽の授業を担当しているという。一人で考えるのではなく、様々な先生にアドバイスをもらいにいったこと。授業の構成を考え、児童に合わせて変化させていること。音楽の専門的な知識を学ぼうとしていること。とても苦労していることが伝わってきたが、話をしている先生の表情は明るく、どこか楽しんでいるようにさえ見えた。「できない」と思うのではなく、「何かやってみよう」とする姿勢を感じた。この熱心さを教師として忘れてはいけないと改めて感じさせてもらった。

グループには弁護士をされている方もファシリテーターとして入ってくださり、違った視点で意見をもらうことができた。多様なメンバーで語り合うことによる学びの充実さと楽しさを感じるカンファレンスであった。11 月にはどのような「対話」が生まれるのか楽しみである。

折り返し 10 月のスタート

ミドルリーダー養成コース２年/南越前町立河野小学校　佐々木 清文

季節は秋になり、とても過ごしやすい 10 月でした。日中はけっこう暑い日があったり、寒暖の差が大きな日があったりしましたが、爽やかな日がたくさんあったように思います。各学校では新型コロナウイルス感染予防対策を取りながらも、様々な学校行事の準備期間や再開で大盛り上がりの日々が続いたり、各種研究会の準備期間や発表会で大忙しの日々だったりしたのではないでしょうか。うっかりすると独善的な実践になってしまいますが、10 月カンファレンスで対話することにより、忘れていたことや新しいことに気付かされることがとてもたくさんありました。また、他都道府県や異校種、多様な年齢の方々から、経験できないような情報も聞かせていただくことができとてもありがたかったです。

午前中は、「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合うことの意味～授業改善を柱とした、組織開発～」をテーマに道場先生（福井市足羽第一中学校）の実践発表があり、その発表を受けてカンファレンスが行われました。発表の中で、パフォーマンスの高い国の先生は教室にいる時間が少なく、職員室での会話や議論が多いということを聞きました。子供から某先生に用もないのに話に付き合わされたなどと、クレームがあったとカンファレンスで聞いたときには、今の子供たちの考え方からすれば放課後まで教室べったりでなくてもよいと気付かされました。

勤務時間内の先生方の働き方は様々なので、時間割の中に集まる時間枠（教科会、学年会、研究どちらかというと部会など）が設けられました。勤務時間内に話し合いの場ができるので良い印象を持ちましたが、時間割にその枠が設けられても良いと思わない方がいました。マンネリ化したり議題もないのに集まったりしていて、集まっていないと何もしていないように見られてしまうなどと話をされていました。なるほどと思いましたが、話し合いの枠がある学校では、議題がないと開か

れないということだったので、柔軟に運用される枠ならあってほしいと思いました。

ファシリテーターの方が、おおよそ次のようにまとめていました。「世代を超えて学び合うことは、互いに同僚を支え合い、急がずに一歩一歩進んで、みんなの声を聴きながら学び合うことです。また、職場の意欲を高めたり、同僚性を高めたりして教師力の育成にもつながります。コミュニティはコーディネーター的な役割の人がいるとうまく発展していくので、ここで学ばれている方々が、それぞれのコミュニティの中心となっていただきたい。」

午後は、実践の挑戦を語るカンファレンスでした。

実技指導は安全面に配慮することが一番重要なので、サポートをしてくださる先生がいても大変なことです。道具の使い方の良し悪しを試演して、子供に考えさせ互いに話し合わせたところは、自分事としてのこぎりの扱いを考えたのではないでしょうか。思い通りに道具を使えるように考え、作品を作る喜びがある授業になったと思いました。

正解を出すことをよしとしないで、その先にある数学の魅力を伝えようとしたり、グループ活動で違うアプローチがあることを分からせたりする指導をされていました。「感情が揺さぶられないとやりたがらない」と話をされると、「脳が汗をかくくらい考える」ことが大切と、カンファレンスでやりとりされていました。数学の授業と子供の感情面についての語りを熱く感じることができました。

英語で互いに話をする時に、話す内容を書いてからやりとりをすると子供は安心して活動ができるが、これが対話かと疑問に感じられたところに共感しました。語学は語彙数がないと対話も進展しないので、帯どりで練習時間をとったことはよいアイデアだと思いました。対話のテーマに合わせ語彙を増やしたり他の言い方を考えさせたりと、書かなくてもなんとか対話させたいと願い工夫がされていました。

10月のカンファレンスは終わりましたが、今後もたくさんの実践があり報告もあります。カンファレンスで多くの方と出会い、互いの実践で対話ができることをこれからも楽しみにしています。

カンファレンスで得た新しい視点

授業研究・教職専門性開発コース２年/岐阜聖徳学園大学附属中学校　市川　海斗

10月の月間カンファレンスでは、グループの先生方と議論を進めていく中で、自身の学びについて振り返ることができた。

午前のセッションでは、道場先生のお話から、教員間でのコミュニケーションについて話し合った。道場先生のお話では、職員室によくいる先生が良い例として扱われていた。職員室で、先生間のコミュニケーションをよりとることができるからである。自身がインターン先でお世話になっている中学校について振り返っていると、教員間のコミュニケーションについてはとても良い環境があるのではないかと考えた。私立の学校ということもあり、先生方は長い期間一緒に働かれている。その期間で作り上げた関係性があるため、トラブルが起きた時の連携がスムーズであるなということをよく感じていた。しかし、それだけでは、公立では無理なのか？ということになってしまうため、その連携のキーマンは誰なのかという問いをいただき、考えてみた。そこで、常に教員のコミュニティの中心にいる人がいることに気づい

た。その先生は、声が大きく、いつもその先生が話すと職員室中に声が響く。だからこそその話題に興味を持った先生たちが自然と集まり、話すという流れが自然にできている。このように、普段当たり前にみているものでも、深く見つめることにより、新しい発見があり、次に生かすことができることを学んだ。

午後は、互いの実践について話し合いをした。先生方の実践を聞いていく中で、生徒が本当に考えている授業とはという話題が出た。私は英語のスピーキングの実践をしていくなかで、言いたいことを伝える表現は 1 つではないから、自分が思う表現で話してみようということを伝えることにより、テンプレートを口にし終わるというスピーキング活動にならないようにしている。今回の話し合いでは、それに追加して、間違いを直しすぎないことも大切なのではないかというお話をいただいた。テンプレートから脱して、自分で文章を作ることにより、間違いをする可能性は高くなる。しかし、それを毎回訂正していては挑戦していく気持ちを削ってしまう。間違いをどこまで見逃すか、ここは直さなければという境界線はどこで引くのか、これからの実践を通して考えていきたい。

午前と午後 2 回の議論によって、自分の学びを振り返った。自分自身で行っていた振り返りを先生方に話すことによって整理し、さらにそこから新しい問い、視点をいただいて考えることにより、より自分の学びを深くすることができた。

伝えることの難しさ

授業研究・教職専門性開発コース２年/岐阜聖徳学園大学附属中学校　前田　光哉

教職大学院に進学し，約 1 年半が経ち，大学院生活も残すところあと数ヶ月となった。今日まであっという間であったが，１日が濃くじっくりと自分の課題に向き合って進んでくることができたと思う。福井に来て学んだことはたくさんある。例えば，ここに来るまで「学び」といえば講義を聞くなど基本相手から伝えられるイメージを持っていたが，教職大学院のカンファレンスを積み重ねることでイメージが，「自ら伝えることで学ぶ」というものに変化した。人に何かを伝えるとき，自分の頭を整理するので何がわかっていて何がわかっていないかがわかる。また、話を伝えた相手から反応が返ってきたとき、自分の伝えたいことがどの程度伝わって相手にどのように響いているのかを一生懸命考えるようになった。この１年半の間で，聞く場面よりも話す場面の方が圧倒的に頭を使うことに気づき，伝えることで学ぶという感覚がついてきたと思う。この感覚をもとに人の話を聞くと，ただ聞くよりも納得感があったりつながりを感じたりする場面が多い。「聞く」ことのレベルも上がったと感じる。

月間カンファレンスでは週間カンファレンスと違い、異年齢の先生、異分野の先生と対話する機会が多く，新たな刺激を受けることができるため，毎回が貴重な時間である。ただ、そんな中でも苦労する点が 1 点ある。それは自分自身の研究や実践の内容を説明するときの伝え方である。自分自身のテーマの影響で，理科の一歩踏み込んだ内容を話さないと自分の伝えたいことが伝えられないという場面に何度も遭遇してきた。理科を専門としない先生方にわかってもらうように説明するのがとっても難しく，何の工夫もせずに話をして相手を困らせてしまうことが度々あった。1 年次の後期ごろからこの課題に悩むことが増えたと感じる。どうしたら相手に伝わり，夢中になって聞いてもらえるのかを考え試行錯誤をした。その中で，現在はクイズ形式を取り入れながら参加式の説明にし，児童に授業をするときと同様の流れで説明することに挑戦してみた。すると聞き手の先

生から帰ってくる反応が明らかに変わった。興味を持って聞いていただける機会が格段に増え、理科の内容について質問もしてもらえるようになった。また，少し踏み込んだ内容を話しても聞いてもらえる様になった。当たり前のことであるが，自分の思いを伝えることは大切なことであるが簡単なことではないこと，同じ内容でも伝え方や表現の仕方によって伝わり方が全く違うということを実感した瞬間であった。これは学校現場に出ても使える。子どもに何かを伝えるとき，同僚になにか伝えるときには相手がどう思うか，自分が同じように説明されたらどう感じるかをイメージしながら，コミュニケーションを取っていこうと思う。月間カンファレンスでは教科内容を深める勉強では得られないものを得ることができる機会であることを強く感じている。残り数回であるが 1 回 1 回の時間を大切にしていきたいと思う。

目的次第で損もするし、得もする

学校改革マネジメントコース 1 年履修/福井市足羽第一中学校　道場　康智

10 月合同カンファレンスでは、話題提供という形で実践発表をさせていただいた。発表者としてのお話しをいただいたとき、率直に「ラッキーだ」と思い、喜んで発表させていただくことを伝えた。内容は「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合うことの意味」だ。

発表をするに当たって、改めて自分の実践を振り返った。やってきたことそのものを振り返ることはもちろんだが、なぜその実践を行うに至ったのか、どのようにして軌道修正を行ったのか、そこにはどのような要因が影響を与えていたのか、そして教職大学院で学んだことをどのようにして実践に活かしていたのかを、改めて整理し直した。1 年にも満たない期間の話であるが、当時の「よし、やるぞ」という意気込み、それを打ちのめされた時のストレス、同僚と共に成果を出せたときの喜び・・・実践そのものだけでなく、メンタル的な要素も思い起こされた。

私は今回、この合同カンファレンスに参加された大学院生の方々の誰よりも、ほんの少しだが、多くのそして大きな学びの機会をいただいた。多くの方は発表を聞いて、その発表やその内容の善し悪しは別として発表内容から感じたことや考えたこと話し、そしてご自分の実践等々についても語り合ったことだろう。私はそれに加え、発表の機会を通して自分の実践を皆さんよりも多く振り返り、そして整理し、発表の仕方も考え、多くの方を前に語らせていただいた。さらには多くの方に私自身の実践を様々な角度から評価していただき、その声をいただくことができ、私自身の成長につなげることができた。発表の機会は、全員に与えられるものではない。だからこそ、大変貴重でラッキーだったと思っている。

恥ずかしながら、私の過去をお話ししたいと思う。当たり前のことだが、私は小学校から大学まで学校で学んできた。色々なテストも受けてきたし、受験も経験した。当時、私の学ぶ目的は何だったか。紛れもなく「点数・成績・合格」だっただろう。小学校の頃はあまり意識していなかったと思うのだが、中学校からは明らかに「点数・成績・合格」を意識していたし、多くの外的要因から意識させられていたように思う。テストでよい点数を取るために勉強し、よい成績をおさめるために努力し、試験や受験に合格するために時間を使った。小さなテストでも「○○点で合格」と言われれば、○○点を取るために勉強し、挙げ句の果てには○○点を取れる程度に勉強していた。そ

れ以上にも、以下にもならない程度に。勉強量は必要最小限にしようとさえしていたのではないだろうか。この姿勢は大学に行っても変わることはなかった。単位を取るために勉強し、単位さえ取れればよいと考えて、ギリギリ合格できそうな範囲で勉強していた。同じ合格なら、努力の量は少ない方が得だとさえ考えていたのではないだろうか。学ぶ目的が「点数・成績・合格」であり、その目的が達成できる程度にしか勉強していない自分がいた。

教員になり、学ぶこと、勉強することの本来の意味を本気で考えるようになった。そして今、私はここ教職大学院で改めて学ぶ機会を得ている。今の私の学ぶ目的は「教員として成長すること」にある。私自身が成長すれば、私が属している学校の成長にもつながる可能性があるし、学校の成長があれば学校に通う生徒の成長をより促す可能性がある。成長することには限りがない。ここまででいい、これだけすればもういいというものではない。だから人よりも多くの学ぶ機会をいただき、時間と労力を使うことができたのは本当にラッキーだった。単位取得を目的にしていた大学生だった頃の私なら、人よりも多くの学ぶ機会を得て、時間と労力を使うことは損だと考えていたかもしれない。今は違う。ラッキーだったし得をした。

今回の発表を通して、自らの実践を振り返り、整理するという大きな機会をいただけたと同時に、こうして自分の人生を振り返り、学ぶ目的が違うだけでこうも違うのかとも改めて考えさせられた。そして許されるなら「成長」を目的に、もう一度大学生生活をやり直したいとさえ思う。しかし、残念ながら人生にやり直しはない。この後悔をこれからの自分の人生に活かし、学び続ける教師、学び続ける人でありたい。

協同体としてのコミュニティづくりの課題と歩み寄りの姿勢

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井県立丸岡高等学校　酒井　俊典

本稿において、10 月月間合同カンファレンスで学んだこと・感じたことを踏まえ、学校内コミュニティの在り方について論じていきます。

今回の月間合同カンファレンスでは福井県立大野高校の上中一司先生の実践を聞き、午前は「学校文化の共有の必要性」と「行事目的の共有の必要性」、「世代間ギャップ」について、午後には自分のこれまでの実践について語る機会が設けられました。

「学校文化の共有の必要性」と「行事目的の共有の必要性」については、教員の入れ替わりにかかわらず脈々と受け継がれていく学校の文化・校風を新任の教員にも確実に共有しなくてはならないということから教職員間の関係性や連携、教職員全体で同じ方向を向いていくことがそれぞれ重要であること、また、学校行事についても“なぜその行事を行うのか”という目的を教職員間で共有しなくてはならないことを学びました。

最後に「世代間ギャップ」については初任者、中堅、熟達の世代間にギャップがあり、そこでのギャップを埋めたり、初任者側から熟達者を頼ったりすることでよりよい関係性を築いていくことが重要であることが分かりました。この話は午後のセッションでの自分の実践報告にもつながる話で、かなり印象に残りました。

午後のセッションでは、大学院の夏休み期間であった 8 月末から 9 月にかけてのインターンシップ先

での実践を報告しました。新たな取り組みとして、新学習指導要領の全面実施がされている現高校 1 年生の数学科で単元ごとの小テストとルーブリックによる生徒の自己評価を実施する運びとなりました。その際に自分はルーブリックの作成という形で関わらせていただき、通常は週間カンファレンスで参加できていなかった教科会にも初めて参加させていただきました。その中で感じたのが新しい取り組みに対する反応の“世代間ギャップ”でした。確かに、新たなことを始動することで個人の仕事が増えてしまうことは誰にとっても好まないことではあるのですが、いわゆる熟達者世代からの否定的な雰囲気を感じ取ってしまいました。それに対して未熟な自分は反発心を抱いてしまったのです。しかし、今回の合同カンファレンスで熟達者に頼るという術を学び、確かにこちらからの歩み寄りが足りなかったと反省しました。早速、次のルーブリック作成の際には頼ってみようとも思いました。

今回の月間合同カンファレンスに参加して改めて思ったことがあります。それは、自分の視野はまだまだ狭いと言うことです。そして、異校種の先生方や現職の先生方ならではの視点からも自分の実践を振り返ることができる貴重な機会を今後も大切にし、自分の研鑽を高めていきたいです。

10 月カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース２年／越谷南高等学校　**加藤　悟**

夏の集中サイクルが終わって２ヶ月ぶりに行われた合同カンファレンスは、「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」というテーマのもと、大野高等学校定時制教頭上中先生の発表から始まりました。夜間定時制の勤務経験があるので、当時の自分と照らし併せながら聞かせていただきました。当時勤務していた夜間定時制は、機械科、電気科、普通科を有する１学年３クラス規模の学校で、職員も常勤の先生が 30 名ほど。生徒は、110 名ほどいる比較的規模の大きな学校でした。着任早々私が担任をした１年生のクラスは、留年した生徒を含めて、40 名ほどのクラスでしたが、実際には 28 名の生徒が毎日登校していました。このクラスは、持ち上がりで２年間担任をさせていただきました。養護教諭と同じ学年を組んだ先生３人で、「はたらく」ことを生徒に意識させる取り組みを行いました。具体的には、他のクラスと一緒に面接に関する授業を行なったり、ハローワークを訪問し、職員から利用の仕方について講演をしてもらったりしました。また、今回のお話にもありましたが、特別支援学校に入学することができなかった生徒や特別な支援を要する生徒も多く在籍していたので、福祉とのつながりを理解するために、障がい者就労支援施設の方から直接お話を伺ったこともありました。

今回のお話を聞かせていただき、全日制に比べて比較的時間に余裕のある学校だからこそ、一人ひとりの子どもと向き合うための知識を教員全体で身につけていくことが大切なであることを考えることができました。また、当時の私は、まだ駆け出しで学校を組織として見ることができていなかったことを振り返ることができました。

今回のカンファレンスでは、東京サテライトの院生の他に、外部の先生も交えて話をさせていただく

ことができ、新たな刺激をいただくことができました。

午前のグループでは、生徒会担当として生徒と共に校則の改善に取り組まれているなかで、ある生活指導の先生から「自分達の主張をいうのはどうなのか」と生徒に対して投げかけたことや SNS 上での陰湿ないじめに対して取り組んでいるが、分掌だけの取り組みとなってしまい学校全体に波及していかないことをお話しされていました。他の先生からも横のつながりをどうしていくかについてお話をされていました。教頭として先生たちを見てみると、もっと多くの先生に関わってもらいたいことがあります。もっと助け合う組織でもいいのではないかと感じることもあります。話を伺いながらどうすればいいのか解決できるのかを考えていたところ、ファシリテーターの先生から「子どもを介する」ことで話ができるというアドバイスをいただきました。先生たちは、子どもたちのために普段からさまざまな取り組みをされています。学校は、子どもたちのために学校としてできることを先生たちと改めて考えていきたいと考えるきっかけをいただくことができました。

午後は、新たなメンバーで午前中に話したことをもとに進めていきました。看護師さんから育成をしていく中でリフレクションが大切であるが、働き方改革の名の下になかなかその機会が得られていないことをお話しされていました。どんな仕事においても、振り返ることで次への成長につながっていくと思います。教員という仕事は、教室に入ってしまうと一人で行うことが多いので誰かと振り返ることが少ないですが、自分だけの振り返りだけではなく、授業を公開し、多くの先生と振り返ることも成長のためには必要なことだと感じました。また、話を伺っていく中で教員と看護師の仕事は、誰かのために働くという点で似ているのではないかと考えました。

今回、他の業種の方と話をすることで、今までにはない視点をえることができました。また、参考になることは取り入れていかなくてはならないと感じました。それは、病院では一人ひとりの患者さんをチームで看護し、学校では一人ひとりの生徒に対して、チームで育てているので、対象とする人は異なるが、考え方は似ているのではないかということです。

教職大学院での学びもあと少しとなりました。少しでも勤務校の組織を改善できるように取り組みを進めていきたいです。

札幌ラウンドテーブル報告

「NoMaps EDU2022×札幌ラウンドテーブル」を振り返る

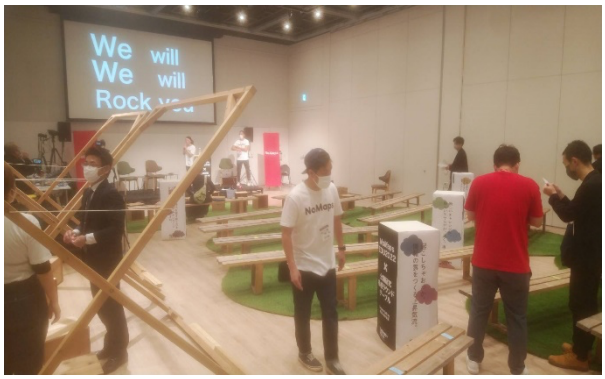
福井大学教職大学院　前田　健志

今回､3 年ぶりに札幌ラウンドテーブルが開催された。

3 年前に参加した時にも感じたのだが、教員以外の参加者が非常に多い。

正確には把握していないが、「高校生・大学生」「教員」「企業・自治体・地域住民」の 3 者のそれぞれの人数が大体同じくらい。

教員・教育関係者が会をリードするのではなく、「教育に関心や思いのある」本当に多様なメンバーが協働し､学びの場をつくりあげていくという､他のラウンドテーブルでは、なかなか味わえないものになっている。



その札幌ラウンドテーブルが、今回、更に進化していた。

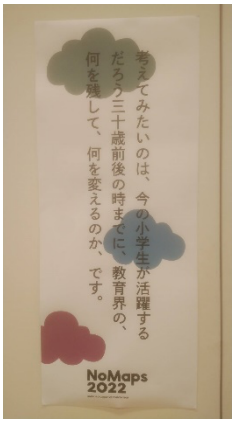
タイトルにもあるように、今回は「NoMaps EDU2022」という別の教育イベントとの協働(コラボレーション)。

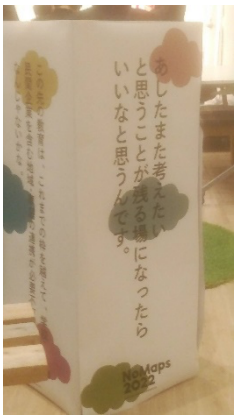
このコラボレーションは、会場に向かう道から感じることになる。

官公庁やメインストリート、ビルのエレベーターや飲食店など、至る所に本イベントのチラシが掲示してある。

札幌の町全体で、この教育イベントを盛り上げよう、札幌の教育を創り上げようという熱意を感じる・・・。

会場に到着すると、手作りのイスやボード、人工芝など、心が和むような学びのスペースが広がっていた。その学びのスペースのいたるところに、考えたくなるような「問い」や心に刺さる教育への思いが、ボードで掲示してある。





イベント内容が始まる前から、もう素晴らしい学びが始まった。いたるところにある「問い」やメッセージが、自分の脳を動かし、会場の様々なデザインが、そこにいる人の対話を自然と促す・・・。

学びを促すのは環境だけではない。運営スタッフも、「高校生・大学生」「教員」「企業・自治体・地域住民」がごちゃまぜ。自然な混ざり方をしていて、改めて「連携してるな～」なんて感じることもなく、昔から一緒にやってきたかのような状態になっている。「連携」という言葉はもはや当てはまらない・・・これは「融合？」

そして、こんな問いが湧き出てくる。

「素晴らしい学びあいができる環境をみんなでつくる」「札幌の教育を皆で創っていく」というヴィジョンがチームに共有されているからこそ、このような協働が可能になっているのだろうか？ここにはどんなプロセスがあったのだろうか？」

イベントが始まる前から、頭はフル回転。

素晴らしい学びがすでに始まった中で、メインセッションへと入っていく。

タイトルは「答えのない時代を生きる力を育む」～枠を超えた「協働・共創」の価値とは～

まずは３人の実践報告から始まった。

１人目は連合教職大学院奈良女子大学の鮫島先生。

現在の教育課題を鮮明にしつつ、中堅教師教育の実践、「つなぐ・こえる・ささえる」自律分散型の実践コミュニティの実践を語られた。

２人目は岡山の一般社団法人まなびと代表理事の江森さん。

鮫島先生の最後のお話の「高校改革を通じてのまちづくり」のパスに、見事に応える形で実践報告が始まった。鮫島先生が“学校内から外へのベクトル”に対して、江森さんは外部から学校に入り、先生たちと地域探究プログラムを一緒に創るという、“外から学校内へのベクトル”。まさにサブタイトルどおり「枠を超えた「協働・共創」の価値」を両面から見られた実践報告。実践報告の中で感じたことは、高校生であれ教師であれ企業人であれ地域の人であれ、皆「未来を創る人」であるということ。そういった意味では皆、同僚。協働のコアにあるのは「未来を共に創る」ということではないだろうか？ということは地域連携は「頑張って連携しよう」とか「新しいチャレンジ」という性質のものではなく、そもそも「人間としての自然な営み」なのではないだろうか？

そんな「問い」が頭に浮かんでくる中、３人目のまちづくりコーディネーター・絵師の林さんの実践報告へと入っていく。

前のお二人の話を土台に、「教育」が「まちづくり」に昇華された、と感じるような実践報告。

例えば「日本の余白に、大学(学びたい者が集まって探究)をつくる」というプロジェクト。道路に大学を創ったり、川をおもしろくしてみたり、あったらいいなと思う公園を創ったり。全ての実践に共通するのが、何のために○○があるのかみんなで考えて、こうすればもっといいのではないか、というアイディアを絵に描いていき、それを小さい規模で実践してみる。林さんの絵師としてのスキルもいかんなく発揮され、前のお二人の実践報告でのお話や思いが一気に可視化されていくような感覚。

私の頭の中で、お三方の実践報告が見事に「融合」していった。「繋がっている」というレベルではない。

そして会場とのやりとりも含めたセッション「TEAM をつくろう」に入っていく。

ただ、私の中ではすでに会場は「グループ」ではなく「TEAM」になっていた。

セッションの中で、「グループと TEAM との違いは何か？」や「TEAM になるためには？」などの「問い」が投げかけられていたが、もはやそれは不要なくら

い、参加者の中で「協働とは何か？」という「問い」がすでに内在化されていたと思う。

その「問い」に対する参加者それぞれの言語化に耳を傾けながら、また自分の頭の中が揺らされる。最も揺らされたのが、会場の設営にあたったスタッフさんの語りだ。

写真にあるように、会場には白い大きな紙に、“雲”の紙が貼られていた。この雲は、参加者が受付の際、「今日のラウンドテーブルで、自分は何を持って帰りたいか？」という「問い」に対しての答えを書き込んで貼ったものだ。“赤い紐”はメインセッション開始時には無かった。メインセッションの最中に、スタッフさんが、これとこれは繋がっているなと感じたものを、“赤い紐”でどんどん繋いでいってくださったのだ。そして、この「TEAM をつくろう」のセッションで、参加者が書いた答えや、他との繋がりが紹介されていく。会場で発言しなかった人同士も、この演出でどんどん繋がっていく。

「雲」には２つの意味が込められていた。１つ目は“モヤモヤ”。色々考えたくなるような「問い」を持って帰ってもらいたいという思い。２つ目は“クラウド”。つまり、皆の思いを貯めて可視化したかったからだそうだ。「教育イベントをかっこよく、皆の心にずっと残るように・・・」。これは自分には不足している視点だった。「言葉」にたよりすぎている・・・。学びを生み出すのは言葉だけではない。「デザイン」の重要性を再確認した。

そう考えているうちに、メインセッションは終わりに向かっていく。

その時会場の至るとこに貼られている「ＮｏＭａｐ」という言葉が、僕の中で急に輝きだした。「ＴＥＡＭってあらかじめ「〇〇するものだ」とか形が決まっているのではなく、みんなで創り出していくもの」＝「地図のない未来を創っていく人たち＝ＴＥＡＭ」そんな大切なメッセージを受け取りつつ、参加者はそれぞれ午後の分科会へ。この流れも完全にシームレスだな・・・。

私は午後の分科会は「A　異なるコミュニティが織りなす学びのかたち～高校生を伴走することで生まれる気づきと学びの価値とは～」に参加。ここでも見事な協働を目の当たりにすることになる。

まずは大学生、井瀬さんによるアニマドーレの実践報告。

高校生の時にアニマドーレに参加してからの自分の気づき、変容がまず丁寧に語られた。アニマドーレの参加者に多様性があり、それらが尊重される空気感の中で、否定も肯定もどちらもない場が、自己開示に繋がり、自己変容につながったこと。出会いが自分を大きく成長させたこと、などなど。大学生になってからは、スタッフ側になり、そこでの気づきや戸惑い、自分のアニマドーレに対する価値観の変化についても丁寧に語られた。大人たちが言葉ではなく、自ら実践する姿で教えてくれたこと。言葉だと多くは伝えられないという気づき。そして、先生も答えを教えてくれるのではなく、答えを見つけようとする自分を支えてくれたこと。彼女が「どう伴走すればいいか？」「いいＴＥＡＭって何？」と悩み、模索する中で、今までの自分の経験を振り返り、価値づけがされていく・・・その学びを会場が追体験する、素晴らしい実践報告。

次にＮＰＯ法人 E-Link の平野さんの実践報告。報告の中心は高校生の探究学習の場である「まなびまくり社」での実践。先ほどの高校生・大学生の視点ではなく大人の視点からの「伴走」「協働」の在り方の模索。全ての語りに共通していたのが、「共に未来を描き、共に悩み、共に実践し、共に楽しく学びあう」というスタンス。もはや伴走という言葉に違和感を覚えだした。伴走者という明確な役割があるのではなく、時に子どもが大人を伴走したりしているので、「共走(共に走る)の方がしっくりくるのではないか？」「伴走者がだれかわからないのが協働・TEAM なのではないか？」などの「問い」が溢れだす。

アニマドーレ・まなびまくり社の２つの実践は高校生の最近接発達領域を生み出した

①活動の生成
動機の形成：「高校生の自分には無理」という常識を超える・・・大人の意義①
農産物などのモノの背後にいる「人」(悩み)と出会う
⇒問題を共有し、解決に貢献したいという意欲・・・大人の意義②

動機の発展：本物の評価による自信
新しい世界を拓く(ワクワク・ドキドキ)・・・大人の意義③

②共同探究者としての大人
正解を示すのではなく、悩みを抱えつつ協働で対峙する大人
答えのない問題を共同で探究するモデル
＝高校生が生き方を探究する活動を組織するためのモデル

③学校外の現実世界での活動＝他の活動主体との協力が必須
関係調整を担う大人
重なりあうコミュニティ：相互の活動の同期
高校生のプロジェクトでも実際の活動の緊張感と達成感を伴う
高校生の活動によって社会に働きかけるダイナミズム
Cf. 半歩先のチャレンジを　But 半歩先とは？(当事者の歩幅を考慮)

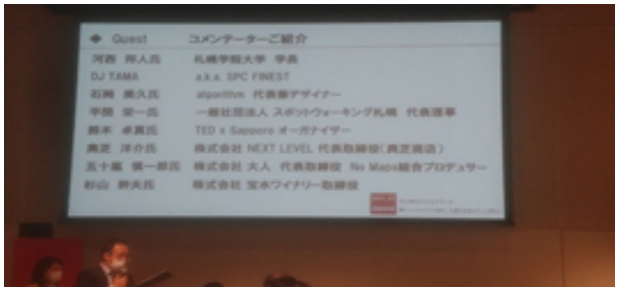
④発達の場を協働で創造する実践
自己形成の基盤を自分たちでつくる(集団的自己教育)＝自立の回路

お二人の実践報告も素晴らしかったのだが、3 人目のは北海道大学の宮崎先生が、お二人の実践報告を聞きながら、「学びとは何か？」「何が学びや自己変容を生み出したのか？」という問いをヴィゴツキーの最近接発達領域の協働創造と絡めて、振り返られたのも、また見事だった。

まさに「実践」と「理論」の見事な往還。順番も、「理論」が先なのではなく、「実践」が先にあり、そこから知が紡ぎだされるという、自分の中では非常にしっくりくる学びのかたち。前のお二人の実践報告の価値がどんどんどんどん上がっていく。「理論⇒実践」という順番では、こんな学びは生み出されなかったのではないか・・・

まずは「実践」、そこから知を皆で紡いでいくのが、協働の学びの外せないポイントなのではないだろうか・・・そんな「問い」が頭をめぐる。

お三方による見事な協働を目の当たりにした分科会 A。その後の分科会 C では、それまでとは違った会場の様子を目にすることになる。



分科会 C のテーマは「探究コンテストピッチ～未来をつくる若者と社会起業家が出会う場所～」。私は、高校生や大学生がプレゼンを行い、社会起業家

(大人)が本気でアドバイスをしたり、協働を生み出したりする場だ、と開始前は思っていた。司会者の方の紹介を聞く限り、社会起業家の方々も、素晴らしい実践をされている方々ばかりだ。高校生たちとどんな化学反応が起こるのか、胸が高鳴った。

しかしピッチが始まると、早速違和感が・・・。よく見かける学校内でのプレゼンのような、テンプレどおりの発表が続く。もちろん高校生たちは頑張って話をし、内容が「スゲー」と思うものもあるのだが、発表者それぞれの個性・発想・モヤモヤを感じ取れなかったり、表層的な話ばかりで、思いの強さも感じられない。また、こんなにも素晴らしく面白い大人たちがそろっているのに、1発表につき、1人しか大人がコメントしない。コメントの時間がかなり限られていたので、突っ込んだ質問やアドバイスが圧倒的に少ない・・・。あくまで個人的な感覚だが、「高校生なのにすごいね」みたいな、子どもたちに忖度しているような雰囲気さえ感じた。これが本気のぶつかり合いなのであろうか？おそらくこれはコメンテーターの問題ではなく、設計の問題ではないだろうか？自分がコメンテーターでも、あの割り当てられている時間で、本気のぶつかり合いを成立させるのは難しい。どんな意図で、どんな議論をして、このような設計になったのだろう・・・モヤモヤが募る。

しかし、ここで「「協働」とは何か？」という「問い」が改めて頭に浮かび、学びが促進されていく。先ほどまでの素晴らしいメインセッションや分科会Ａとの違いは何か？この分科会Ｃは、様々な人が、そこにいて「連携」「グループワーク」はしているが、「協働」「チームワーク」にはなっていない。素晴らしい子どもと大人が集まっていても、共通の思いがなかったり、一緒に何かを創り出そうとする動きがないからではないだろうか？おそらく、役割分担はきちんとされているのだが、それぞれが役割をこなすだけで終わっている。分科会Ｃの設計の段階から「プレゼンター(高校生)・アドバイザー(社会起業家・大人)・参観者の三者が共に、素晴らしい学びの場を創り上げよう、何か面白いことを一緒に始めよう」というビジョンが共有されていなかったのではないだろうか？もちろん設計の段階からコミュニケーションを取り合う時間などが十分取れなかったなど、色々難しい問題があったのかもしれない。ただ、この分科会Ｃのおかげで、自分の中では「協働」と「連携」の違いを、如実に体感でき、逆に学びが深まった。むしろこの1日の中で、一番モヤモヤし、考え、学び多かった時間かもしれない。こういった時間をあえて設計していくというのも大切なのではないか？でもそれを意図的にどうやって入れていくのか？そんなモヤモヤを持ちながら、一日目を終えた。

「協働・共創」について、色々な発見・いいモヤモヤを持ちながら、2日目のラウンドテーブルを迎えた。

何十回と経験してきているラウンドテーブル。やりなれているラウンドテーブルだが、1日目の学びが作用して、初めてラウンドテーブルに来たかのようなワクワク感。最初から「違いを楽しむ、同じを楽しむ」空気感、「共に最高の学びの場を創り上げよう」というヴィジョンが溢れる。私自身、司会としてアイスブレイクをさせていただいたが、そのアイスブレイクなどいらないくらい、場が出来上がっている。その温かい場に、福井大学教職大学院の木村先生から「ラウンドテーブルの意義」や「ファシリテーター・語り手・聴き手の在り方」が投げかけられる。何度も拝聴したことのあるお話だが、初めてきいたかのように、自分の頭と心に刺さる、刺さる。昨日からさんざん「協働・共創とは何か？」を考え、学びを深めてきたからだろう。そう考えると、ラウンドテーブルが始まる前からラウンドテーブルは始まっているし、ラウンドテーブル開始前をどうデザインするのかも、非常に重要ではないだろうか？

ラウンドテーブルが始まった。私のテーブルでは、絵本作家の太陽と牛さん、札幌市立大通高校の高校生のお二人の実践報告から、テーブル全員で学びを深めていった。太陽と牛さんは、丁寧に自分の半生を語られ、その経験が絵本に全て繋がっていく見事な語り。ここまで語るのに、どれだけのリフレクションを経てこられたのだろう？と思うくらい、自分の経験への価値づけがなされていた。そして、聴き手もどんどん質問をぶつけていくことで、テーブルの中に再度、「学ぶとはどういうことか？」「何が学びを引き起こすのか？」「対話が自然に生まれる設計とは？」「協働とはどういうことか？」という「問い」が溢れた。これらの「問い」は、参加者が以前から考えている「問い」なのだが、グループの中での対話を通じて、改めて紡ぎだされた「問い」だ。太陽と牛さんの「絵本」が、親子にそれぞの解釈の違いを生み出し、そこから対話が始まる。そんなことを考えていると、再度「協働とはどういうことか？」という問いが頭をめぐる・・・。昨日分かったような気になっていたものに、メスが入る。素晴らしいモヤモヤ。

そんなモヤモヤを抱えながら、大通高校生の実践報告が始まる。不登校になった時の自分の感情や思考、フリースクールでの気づき・自己変容、そして大通り高校に入学してから取り組んでいる「フリースクールを創って、教育の選択肢を増やしたい！」というプロジェクトの実践を語ってくれた。お母さんも参加者としてテーブルにおられ、親としての苦悩と、それをどう子どもと共に乗り越えてきたのか、そして今されている、不登校の子どもの親向けのコミュニティづくりの実践報告をしてくださった。お母さんが語っておられる時の、高校生の顔が非常に和やかだったのが、とても印象的だった。いったいどれだけ二人で対話をされてきたのだろう・・・。むちゃくちゃしんどい事、複雑な感情、本音・・・色々なものをぶつけあい対話してきたからこその、この信頼関係なのだろうか？涙が出そうになってしまった（晩、思い出して号泣してしまった・・・）。「あの時にそんなこと考えていたんだ。そんなこと思ってくれていたんだ」という発言もあり、お互いの新たな発見もありつつ、また聴き手がまたどんどん「問い」をぶつけていく。「学校とは何か？」「個別最適化とはどのようなものか？」そして、何より「協働とは何か？」。語り手、聴き手、皆でこの「問い」を紡ぎだし、思索を深めていった。

最後になるが、この 2 日間、一貫して「協働とは何か？」について、様々なものを通して考えていった。恐らく、関わった全ての人に内在化された「問い」なのではないだろうか？未だにいいモヤモヤが止まらない。札幌の学びは、北陸に戻ってきた後も続いている・・・。

研究会等情報

163 号でも掲載しましたが、研究会等の案内が寄せられた情報から 11 月以降の公開研究会についてお知らせいたします。
皆様にとってもお忙しい季節だとは思いますが、同僚の学びに耳を傾ける機会としてはいかがでしょうか。

●研究会／研修会
・11 月 25 日（金）福井市安居中学校　創立 10 周年記念公開研究会
・12 月 17 日（土）奈良女子大学附属幼稚園　オンライン型研修
（令和 5 年）
・1 月 27 日（金）福井大学教育学部附属特別支援学校　公開研究会
・3 月 7 日（火）～9 日（木）福井県教育研究所　ふくい教育フォーラム

●入試説明会
・12 月 25 日（日）福井大学連合教職大学院入試説明会

Schedule
11/19 Sat. 月間合同カンファレンス（11 月）**A** 日程、 **11/26 Sat.** 同 **B** 日程
12/24, 25, 26 Sat. Sun. Mon. 冬期集中講座サイクル **A** 日程、 **2023/1/5, 6,7 Thu. Fri. Sat.** 同 **B**

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 **編集後記** 】164 号も皆様の寄稿により、発行することができました。さて、中教審の答申でも、教師自身の学び（研修観）の転換が求められていますが、このニュースレターを読むたびに、院生の皆様の教師としての学びの変容、まさしく研修観の転換を感じます。天高く馬肥ゆる秋、その深まりとともに皆様の学びも深まり、その肥えた学びの成果が来月の冬の集中講座に生かされますことをお祈りします。（I・O）

教職大学院 Newsletter　No.164

2022.12.13　公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp